

鍵盤指導者による音楽療育活動

—音楽でつなぐ心の輪—

稲原文江、大庭美奈子、島田美智子、藤井京子（音楽療育鍵盤指導研究ネットワーク）
司会：小澤真弓 書記：中村真貴（文責）

司会の小澤氏より開会の挨拶、発表者の紹介、そして進行についての概要が伝えられた。続いて発表者の藤井氏より音楽療育鍵盤指導研究ネットワークの紹介と今回の趣旨が紹介された。

音楽療育鍵盤指導研究ネットワークの発足経緯（前身のjet音楽療育研究会の時代から含め18年間の活動）や、月一回、指導と活動の事例を報告する定例会、ハンディキャップを持った生徒の音楽指導、健康と音楽の指導をテーマにし、研究活動を発表するシンポジウムの紹介、また2年に一度、障がい児・者によるコンサートを行っている事も紹介された。

また、2年に一度行っている障がい児・者によるコンサート（ハートフルコンサート）についても紹介された。

次に、大庭氏が鍵盤指導者として見るダウン症、自閉症、知的障害の特徴を述べた。

大庭氏は、2年に一度行うコンサートで幅広い地域の別教室に通うダウン症の生徒達（25歳、25歳、14歳、15歳）でアンサンブルを試み、次のように報告している。

- ・それぞれ別地域（埼玉、東京、千葉、栃木）なので合同練習が出来ない為、当日のみ合わせる事にした。
- ・当日のみの合わせの為には、電子オルガンの記録再生機能で当日と同じ状態、音源を作っておく。当日と同じ音をずっと聴かせながら練習をすると弾けるのではないかと考えた。
- ・ダウン症の軽度、重度によって弾けるパート、テンポを変えたり、カウンターラインを作って分担する。
- ・電子オルガンの再生機能を上手く利用した事でいつでも本番の仕上がりと同じ状態で学べる。その為、当日だけのリハーサルと本番も迷う事なく出来た。又、華やかな音色、仲間と同じステージに上がる喜び、衣装を揃える楽しみ、2年に一度会える喜び等、達成感を味わった。また、講師同士もダウン症の生徒達のレッスン情報交換も出来、指導技術の向上がもたらされた。今後、このようなレッスン技法により、指導技術の発展の可能性が示された。
- ・結果として、音源の均一化、マイナスイオン音源の作成、楽曲の記録機能、電子キーボード独自の機能を活用してダウン症4名の遠隔地でのアンサンブル練習と演奏会当日のアンサンブル発表を行った。疾患への理解やレッスンの見通しを個々に連絡することで演奏指導技術向上の効果を感じられた他、生徒達もアンサンブルを楽しんで楽曲を発表する事が出来た。

・今後も電子オルガンの機能を更に活用して行き広めていきたいと述べた。

次に島田氏が施設（知的障害、ダウン症、自閉症の方々が作業をし、社会生活の支援をしている）音楽クラブ活動の報告を次のように述べた。2002年春にメンバーを入れ替え開講。（6-9名 月一回 90分。その内、年に8回は島田氏達外部講師による指導）

・まず初めに体でリズムを感じ、一定のテンポに合わせる感覚を身に付ける事を目的とし、音楽を聴きながら簡単なステップなどを行う。

・鍵盤の場所の把握、打鍵の練習、指の動きをスムーズにする事を目的に簡単なフレーズを練習する。

・鑑賞し、曲のイメージを抱き、演奏への意欲を持たせる。ドレミ唱の後、ワンフレーズ毎に鍵盤の確認、各自の指の使い方を確認し、演奏する。

・指導ポイントの留意点は、個々の可動範囲の中で無理のない演奏を出来るように心がけ、鍵盤演奏が出来たという充実感や演奏する事の楽しさを感じられるよう配慮する。又、常に音源を活用する事で音楽の中に自分が参加して演奏するという満足感だけでなく、等速感を養いつつ演奏のテンポの定着も図っている。

・成果と今後の方向性として、新しい曲の吸収の早さ、テクニックに対する順応性も上がってきた。又、リズムステップ等の体の動きや反応も良くなってきた。各自の鍵盤演奏に関する可動範囲も少しずつ広がってきている。レガート奏、本来のテンポに近づけた。コンサートなどを通してそれぞれの社会参加につながった。曲数を積み重ねる事でパートを分けてのアンサンブル演奏も楽しめるようになった。これから、より演奏者自身が楽しく自身を持って演奏に向かえるよう、更に指導技術を凝らして行きたいと述べた。

最後に藤井氏が、次のように述べた。今日の発表はごく一部の活動報告だが、このように一人一人指導方法が違うので、今後も指導技術の勉強を行なっていく。

次のハートフルコンサートは、2017年7月9日ヤマハエレクトーンシティ渋谷にて行われる。

発表後の質疑応答の時間に、この活動に発足開始から携わっておられる中島氏が『生徒がいかに楽しんでくれるか、その技術を図りながら、今後も活動していく』と述べられた。